京都女子学園創立90周年（創始101年）
現代社会学部開学記念公開講座

21世紀、東アジアの共生
―芸術と政治が語る現場―

企画・文責：柴山哲也

「共生」とらえる知的基盤を考える―多彩なパネリスト、華麗な舞台で魅了

公開講座プログラム

開催日時　2000年11月1日（水）
場　　所　京都コンサート・小ホール
第1部　パネルディスカッション「朝鮮半島の将来と日本」
挨　　拶　柏岡　富英　京都女子大学現代社会学部部長
パネラー　小田川　興　朝日新聞編集委員
日下　雄一　テレビ朝日特報部長
辺　　真一　「コリアレポート」編集長
保阪　正康　函館大学客員教授
蓮　　舫　テレビキャスター
瀬崎　克巳　京都女子大学現代社会学部教授
依田　　博　京都女子大学現代社会学部教授
司　　会　柴山　哲也　京都女子大学現代社会学部教授

第2部　コンサート「魅せる東アジアの民族音楽」
―中国の華・草原の国モンゴルの風・KOREANの舞―
プロデュース／アジアセンター21　坂口　勝春

南北首脳会談、シドニーオリンピックの統一行進などで急速に進展した朝鮮半島の雪解けに始まる東アジア情勢の変化と未来像をとらえる公開講座「東アジアの共生—芸術と政治が語る現場」が、京都女子学園創立90周年（創始101年）、京都女子大学現代社会学部開設記念行事の一環として、2000年11月1日に、京都市の京都コンサートホールで開かれた。

サブタイトルでうたったように、政治の動向と文化のあり方を同時にとらえる目的で、第一部パネルデイスカッション「朝鮮半島の将来と日本」、第二部コンサート「魅せる東アジアの民族音楽」の2部構成の形をとった。

生々しい「現場の政治的な動き」に対して、メディアが伝える表層に幻惑されることなく、いかにして理性的、学術的な分析を加え、歴史的文脈のなかに正当に位置づけ得るか。各方面の専門家による多面的な論議を通してこの課題を学問的に追求することが本公開講座の目的であった。同時に、明治以来、「脱亜入欧」の西欧化の道を突き進んできた日本が21世紀において、いかにしてアジアの一員としての自覚を取り戻し、近隣諸国との「共生」を果たすことができるか。こうした問題を学生諸君を含む参加者全員の問題意識として追求してほしいというねらいがあった。

上述の意図から、第一部のパネルディスカッションでは、同時進行する現実の動向をできるだけ正しく捉える必要性があり、現場の情報に精通した専門家やジャーナリストの参加を求め、細密なファクトをもとにしたデイスカッションを構想した。外部から招いたパネラーは、小田川興・朝日新聞編集委員（元ソウル支局長）、日下雄一・テレビ朝日プロデユーサー、辺真一氏（「コリア・レポート」編集長）、保阪正康氏（函館大学客員教授、戦中、戦後史研究家）、蓮舫氏（ジャーナリスト、台湾、中国関係の研究家）の四氏を招いた（50音順）。いずれも朝鮮半島の動向とこれに関連する東アジア問題について、評論や報道などの現場サイドから長年にわたって追求してきた専門家である。

写真1 21世紀の東アジアの共生という大きなテーマに、真剣な議論が続いた

これに対し本学部からは、元国連大使の経験がある外交専門家の瀬崎克己教授、海外の選挙監視など豊富な現場体験をもつ政治学者の依田博教授が参加した。公開講座開催のあいさつは柏岡富英・本学部長、司会は筆者の柴山が担当した。

パネルでは、1：南北首脳会談が実現した朝鮮半島の雪解けにいたる歴史的な経緯とこれを可能にした国際関係、2：日本と日本外交がおかれた立場と日本人のアジアに対する歴史認識および日本外交の問題点、3：在日外国人の権利と参政権問題、の3つの論点が提起され、順を追って論議が展開された。以下に論議の要点を簡単に紹介するが、あくまで骨子であり、パネルの再録とはほど遠い要約であることを断っておきたい。

1：では、ほぼソウルに滞在して事態の経過を克明に取材してきた小田川氏がファクトに基づいて南北首脳会談の実現にいたる経過を基調報告をし、これを踏まえて問題提起が行われた。在日韓国人ジャーナリストの辺氏は、現実の“電撃的”

な南北首脳会談の実現と雪解けにいたる軌跡を高く評価しながらも、現実には米中日やロシアなどがからむ北東アジアの国際関係の利害のなかでいつ崩れ去るかもしれない危うさを秘めていることを指摘した。日本におけるいわゆる「有事立法」の論議では「朝鮮半島有事」を想定しているが、これは第二次朝鮮戦争の仮想である。一方で平和の祭典としての日韓のワールドカップ共催がある。戦争準備と平和の祭典の準備という矛盾が同時平行的に進んでいる。

蓮舫氏は、「日本のメディアの報道はあまりに祝賀ムードが目立つ。このままうまくゆく保障は何もない。報道のなかで欠如していたものは、朝鮮半島の雪解けと東アジアの現実に対して日本は何をしたかであり、日本政府がどういう貢献をしたかという視点だ」と述べた。そして今回の南北対話の舞台を用意した“裏方”として中国の存在を指摘した。

2：上述の論議から浮かび上がったのは、日本何をしていたかという「日本問題」である。しかし「無為無策の日本外交」などと書く新聞論調に対して瀬崎氏は、過去の歴史的経緯を複雑にひきづる日朝交渉の話し合いが、バスに乗り遅れるな式の時流にあわせる発想では解決しないことを、指摘した。核疑惑、拉致疑惑などの現実的な問題があり、「国益」の観点から解決を迫られる外交課題が山積している。

保阪氏は、「20世紀における朝鮮半島政策にかんする日本の基本的な過ちは、明治維新に山形有朋らが唱えた「権益線」としての「朝鮮」という発想にあった。福沢諭吉の対朝鮮観もそうだったし、戦後の宰相・吉田茂の認識も同様だ。日本の朝鮮半島政策は戦前、戦後を通じてこのような認識からいまだに脱却していないように見える。東西冷戦が崩壊した現在、間違った歴史認識の原点が露呈してきている。21世紀の「東アジアの共生」を考えるには、「隣人」としてとらえる思想に転換しなければならない」と述べた。

日下氏は、テレビ報道の現場において朝鮮半島問題に早期から取り組んできたが、実際には、「北朝鮮に関してメディア側はほとんど限られた情報しかもちえなかった」という。たとえば北の脅威論が出るときは全体が脅威論報道に傾き、飢餓情報が出るとそれ一色になる。しかし「本当のところはわからない」という。今回は、金大中大統領がピョンヤンへ乗り込み、金正日氏と握手する映像が世界中に配信されて、世界中の報道が祝賀ムード一色になった。日下氏は「こうした映像の力を過信してはいけないと」と自戒をこめて語った。

3：依田氏は、在日外国人の参政権問題を捉えるための各種の論点を整理して紹介した。ある世論調査では、賛成派が過半数を上回っているが、反対派も根強い。賛否を分ける背景には、「国家とは何か」に対する認識の相違がある。国家主権を優先すれば外国人参政権はなじまない。しかし普遍的な民主主義という価値を優先すれば、永住外国人への参政権は認め得るのである。

この公開講座が行われたときは、おりしも米国の大統領選挙戦のさなかであった。ブッシュ候補とゴア候補は熾烈な争いを展開していたが、わずかにブッシュ氏の優勢が報じられていた次期である。米国の大統領選挙でどちらの陣営が勝つかで、朝鮮半島の雪解けの行方に大きな影響が出ることがわかっていたため、未来像の洞察はいっそう困難であった。

21世紀年明けのブッシュ政権の誕生で、雪解けの流れは急速に停滞することになった。さらには米国の対中政策も、クリントン政権の時代とはおおきく転換し敵対的なものに変わった。米国はミ

サイル防衛構想（NMD）の推進と協力を日本にも求め、日米軍事同盟の枠組みは従来以上に強化される方向にある。

さらに日本国内における教科書問題や首相の靖国参拝問題などに象徴された一連の保守化傾向が、韓国や中国などの近隣諸国の強い反発を招くなど、21世紀を迎えた東アジアは、「共生」どころか「敵対」の方向性を強めているように見える。

このような厳しい国際関係のなかにあって、朝鮮半島の和解の条件をいかにして継続的に作り出すことができるのか。日本は、「東アジアの共生」に敵対するのではなく、和解にむけてどのように米国、中国、韓国、北朝鮮、ロシアとの交渉を進め説得してゆくのか。そのような大所高所の課題を、市井の一市民、学生諸君が自己の問題としてとらえてゆくための「知的基盤」として、このパネル・ディスカッションは大きな意味があった。

第二部のコンサート部門では、中国のオーケストラ「華夏」（ファシャ）、「モンゴルの民族音楽と舞踊」、「KOREAN の舞」などが行われた。激動する政治の背景にある民衆の暮らしや民族の文化のありかたを、音楽や舞踊などの芸術表現を通じて知覚する。人間としての感性と情緒を共有し、体験することは言葉の論議と同様に重要である。

華夏は、芸術監督常任指揮者クンリン氏が率いるオーケストラで、日本でも多数の公演をおこなっている。中国の伝統音楽の要素をとりいれながら、華やかな現代感覚をもったオーケストラとして、内外で高く評価されている。当日の演目は、「喜洋々」「紫竹調」「彩雲追月」のほか、琵琶独奏「イ族舞曲」「桜さくら」、二胡独奏「空山鳥語」「知床旅情」「蘇州夜曲」など日本音楽もまじえての公演であった。

モンゴルの音楽と舞踊を演じたのは、在日の内

写真2 中国のオーケストラ「華夏」（ファシャ）の舞台

モンゴル出身の音楽家、芸術家集団。舞踊家フホダイ氏の独舞や民族楽器の馬頭琴の演奏、詩吟家のオルスト氏の詩吟「わがモンゴル」などがあり、ふだん日本人が触れることの少ないモンゴルの伝統芸術の一端に触れることができたことは、貴重な体験であった。

「KOREAN の舞」は、朝鮮民族文化の伝承と発展をめざして1980年に創立された「舞踊団 Narusae 飛鳥」（姜輝鮮団長）が演じた。中国、アメリカ、ウズベキスタンなど各地で公演し高い評価を受けている。原色の色彩豊かな民族衣装の独舞や群舞は絢爛としていたが、なかでも伝統の演目「アリラン」の舞いは圧巻であった。

コンサートの総合プロデュースを行ったアジアセンター21の坂口勝春氏は、「東アジアの伝統音楽、舞踊のもつ美の世界に身を置いて、来るべき21世紀社会における文化、新たな人間の想像力とは何かみつけてほしい」と舞台のねらいを説明している。パネルディスカッションのあと、ゆったりと華やいだ気分でコンサートを鑑賞することで、「21世紀、東アジアの共生」といういくぶん抽象的なテーマに、同時代を生き呼吸する人間としての共生の感覚を吹き込むことができた。

ところで、今回の公開講座は濃密な内容が盛ら

れていたにもかかわらず、あいにくの天候の悪さとウイークディという条件が重なって参加者がやや少なめだった。さらに外部から来聴した人より本学学生の参加者が稀少であったことは残念で、一抹の反省点として残っている。ふだんの講義では聴くことができず、触れることもできない貴重な内容だったこともあり、自己啓発をめざす学生諸君はもっと意欲的に参加してほしかったと思う。

最後に、今回の公開講座の実施にあたっては、現代社会学部だけではなく、本学法人本部事務局を含む各方面の関係者の皆さんから協力を得た。ボランティア的な協力もたくさんあり、この場をかりて謝意を表したい。なお、この文章ではパネルディスカッションの細部を含む全体の紹介が不十分であること、パネルの論議の詳細をさらに広範に公開してほしいという社会的、教育的な要請もあることから、別途、刊行することを検討中である。

（了）